色彩教材研究会通信　No.399　2024.7.18

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

● 秋の研究会大会開催のお知らせ

恒例の秋の研究会大会が、2024 年 11 月 30 日（土）と 12 月 1 日（日）の両日、オンラインで開催されます。昨年に続き，合同研究発表会のほか、いくつかの企画を検討中です。オンラインの利便性を最大限に活用し、充実した大会を開催できるように企画され、各企画の詳細は、順次告知されます。研究発表希望の方は準備を開始してください。

■会期　2024 年(令和 6 年)11 月 30 日 (土) ～12 月 1 日 (日)

■イベント（暫定版）

合同研究発表会（詳細は各研究会にお問い合わせください。）

各種企画（講演会等）

■合同研究発表会申込スケジュール

申込〆切：8 月 23 日（金）

要旨・予稿原稿〆切：10 月 15 日（火）

■参加研究会

色彩教材研究会、画像色彩研究会、環境色彩研究会、視覚情報基礎研究会、色覚研究会、測色研究会、白色度研究会、美的感性研究会。

■申込先・問い合わせ先

研究会大会事務局：

kentai2024@color-science.jp

（学会メールニュース No.520 から引用）

源氏物語の色 -52「東屋」

薫、二十六歳の年の秋八月、浮舟の母の中将の君は、薫の所望を聞いてはいたが、高貴な薫との身分違いを懸念して、浮舟の婿には左近少将を選んだ。結婚の準備が進む中、父である常陸介の財力が目当ての左近少将は、浮舟が連れ子で介の実子でないと知り、にわかに介の実の娘に乗り換えてしまう。中将の君は、破談を嘆き、浮舟の異母姉である二条院の中の君のもとに浮舟を預けた。

中の君は、浮舟を薫に推薦するが、その翌日、中の君を訪ねた夫の匂宮が、偶然にも浮舟をみつけてしまう。浮舟の姿は華やかな紫苑（しおん）色の袿（うちき）に、女郎花（おみなえし）の織物と思われる表着（うわぎ）が重なって、袖口がさし出でていると描かれている。紫苑色は、紫苑の花のような明るい紫色。女郎花の織物は、縦糸を青、緯（横）糸を黄で織った色でいずれも秋の色目。

その美しさに、匂宮は、中の君の異母妹とも知らずに言い寄る。この時は事無きに済んだが、事情を聴いた中将の君は、不安に思い、浮舟を三条の小さな家に隠し移す。

この後、薫は、以前より仲介を頼んでいた弁の尼と共に三条の隠れ家を訪ね、ようやく浮舟と逢うことがかなう。　（平山和香子）

● 万葉集のなかの色 -14

倭なる　宇陀の真赤土の　さ丹着かば
　そこもか人の　吾を言なさむ
（巻 7-1376）

福（さきはい）の　いかなる人か　黒髪の
　白くなるまで　妹の声を聞く
（巻 7-1411）

わが背子が　見らむ佐保道の　青柳を
　手折りてだにも　見むよしもがな
大伴坂上郎女の柳の歌（巻 8-1432）

かはづ鳴く　甘奈備川に　影見えて
　今か咲くらむ　山吹の花
厚見王の歌（巻 8-1435）

水鳥の　鴨の羽の色の　春山の
　おほつかなくも　思ほゆるかも
笠の郎女の歌（巻 8-1451）

ほととぎす　来鳴き響もす　卯の花の
　共にや来しと　問はましものを
石上堅魚朝臣の歌（巻 8-1472

倭はやまと、「真赤土（まはに）」は「真」が純色の形容詞に使われている例。黒・白の髪色の表現、「青柳色」「山吹色」や「鴨の羽色」、「卯の花色」など、現代まで使われ続けた色名が、日本漢字の成立以前から存在していたことを、万葉集の中から読み取ることができる。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘）